

# 伝統芸能

## 花鼓

はな つづみ

先月はパリのルーブル公演を皮切りにストラスブール、東京、鎌倉とまわった。その締めが大阪での素浄瑠璃「菅原伝授手習鑑・寺子屋の段」。場所は淀屋橋にほど近い御霊神社の儀式殿。明治から大正にかけて文楽のもっとも華やかな時代を築いた、御霊文楽座の跡地である。花冷えの雨の中、大勢が来てくださった。

同神社の園文夫宮司が懇意という、うどんすきの老舗「美々卯」薩摩会長の子供のころ、従業員ともどもよく聴かされた。落語の「寝床」そのもの「す」との言葉を受けて実現した公演だ。

そこで、桂雀松さんがまず「寝床」を一席。浄瑠璃(義太夫)を聴かせたく

### 文楽太夫 豊竹英大夫



豊竹英大夫「パリのルーブル美術館で」

## ゆさぶられた五感

てたまらない主と、目那芸など聴きたくはない奉公人との痛快極まりないやりとり、客席が湧きに湧く。

その後に、三味線の鶴沢清友さんと「寺子屋」を一段、一時間余語った。素浄瑠璃は初体験の方もおり、始まる前には「この会場がホンマの寝床になるのでは？」と、かなりの不安にかられた。

最初から目いっぱい飛ばして語ったので、途中、へばりかけた。もつアカンと思った時、すすり泣きの声が微かに聞こえ、客席が一心同体のようになっていることに気付いた。それに鼓舞され、渾身の感情を込めて語り終えることができた。明治十七年、御霊文楽座のこけら落としの時に語られたのが奇しくも「寺子屋」。浄瑠璃の神さまが舞い降り、語るもの聴くものの五感をゆさぶってくれたのであろうか。